

中核企業としてブランド牛『佐賀牛』の生産と食肉販売等による地域振興への取り組み

株式会社 桑原畜産(肉用牛肥育経営・佐賀県嬉野市)

地域の概況

佐賀県は、九州北部に位置し、日本海と有明海の二つの海に接しており、温暖な地域である。伊万里市・有田町・唐津市は、古くから陶磁器の産地として有名であり、有明海に面した県南部で養殖される海苔は、全国でも有数の産地となっている。

また、農業においては、佐賀平野を中心に米麦、野菜の生産が盛んで、県北西部や南西部では畜産や果樹が盛んである。

特に、ブランド牛「佐賀牛」は、高級牛肉として全国的に評価を得ており、肥育農家、農業団体、県が一体となってブランドの維持・



桑原秀隆代表取締役社長

発展に努めているところである。

桑原畜産の事務所兼カット工場は、県南西

部の嬉野市にあり、日本三大美肌の湯として知られ観光客が多い嬉野温泉や全国茶品評会では常に上位入賞するなど高級茶の産地として有名な地域である。

隣接する鹿島市で肥育牛、繁殖牛を飼養していたが、平成26年から県中央部にある多

(表1) 経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭(羽)数	経営・活動の内容
昭和48年			・家畜商を営む
63年	肥育牛 食肉加工販売	130頭	・本人従事(就労) ・枝肉カット販売開始 (食肉販売責任者として従事) ・現地雇用で肥育牛飼養(伊万里市)
平成7 ~9年	肥育牛 食肉加工販売	100頭 【目標1,000頭】	・鹿島市のミカン廃園を購入・造成 ・鹿島市牛舎(肥育)を建設 ・伊万里牛舎での肥育牛飼養を中止 ・株式会社を設立(法人化) ・牛皮置場・冷蔵庫を増設
10年	肥育牛 食肉加工販売	100頭	・牛肉商品券(独自)の作成 (産業祭など地域のイベントに協賛し、牛肉の引換券として提供)
10~20年	肥育牛 食肉加工販売	1,000頭 【当初目標を達成】	・鹿島市のミカン廃園(隣接地)を購入・造成 ・牛舎(10か所)建設 ・銀行からの要請により、試験的に動産担保貸付への取り組みを開始 ・肥育牛増頭
15年	肥育牛 食肉加工販売		・事務所兼カット工場を増改築

16年	肥育牛 食肉加工販売		・現経営者が社長に就任 ・飼養管理技術コンサルタントの指導により、飼料給与方法を見直し、肥育成績の向上に努める
22年	肥育牛 繁殖牛 食肉加工販売	1,000頭 50頭	・繁殖牛舎購入、繁殖部門開始 ・学校給食・病院食等へ牛肉販売（地産地消の推進） ・佐賀牛の輸出に積極的に協力
23年	肥育牛 繁殖牛 食肉加工販売	1,000頭 50頭	・事務所増改築 ・社宅建設（福利厚生の充実）
25年	肥育牛 繁殖牛 食肉加工販売	1,000頭 50頭	・繁殖牛へ稲WSCの給与を開始
26年	肥育牛 繁殖牛 食肉加工販売	1,000頭 70頭	・第23回佐賀県畜産共進会（肉牛枝肉の部）で最優秀賞・農林水産大臣賞を受賞 ・多久市牛舎を購入・改築（肥育） ・嬉野市ふるさと納税制度の返礼品に当経営から佐賀牛を提供し、好評を得る
現在	肥育牛 繁殖牛 食肉加工販売	1,380頭 70頭	・肥育牛収容頭数1,550頭（多久市牛舎改築後、増頭予定） ・戻し堆肥の確保のため堆肥乾燥施設を建設

嬉野市および鹿島市に接する多良岳周辺では、肉用牛および豚、肉用鶏の生産が盛んで、地域の主要な産業となっている。

経営の概要

桑原畜産は、活動を始めた当初から肥育牛の生産とその一部を加工販売してきており、創意工夫と熱意を

久市で新たに肥育牛を飼養され始め、県域での畜産経営・食肉加工販売を営まれている。

もって肥育牛1380頭、繁殖牛70頭まで規模拡大を行ってきた。

（表2）経営実績（平成27年）

経営の概要	労働力員数（畜産・2000hr換算）		家族・構成員	1.8人	
			雇用・従業員	8.4人	
	肥育牛平均飼養頭数	肉用種	1,154.1頭		
		交雑種	0頭		
年間肥育牛販売頭数	肉用種	0頭			
	交雑種	561頭			
	乳用種	0頭			
収益性	所得率			6.4%	
	肥育牛1頭当たり生産費用			1,778,197円	
生産性	肥育（品種・肥育タイプ） （黒毛和種去勢若齢）	肥育開始時	日齢（月齢）	265日	
			体重	282.8kg	
		肥育牛1頭当たり	出荷時	870日	
			出荷時生体重	801.7kg	
		平均肥育日数		605日	
		販売肥育牛1頭1日当たり増体重（DG）		0.86kg	
		対常時頭数事故率		0.3%	
		販売肉牛1頭当たり販売価格		1,259,289円	
		販売肉牛生体1kg当たり販売価格		1,571円	
		枝肉1kg当たり販売価格		2,208円	
肉質等級4以上格付率 ※		88.8%			
もと牛1頭当たり導入価格		575,020円			
もと牛生体1kg当たり導入価格		2,033円			

ブランド牛の「佐賀牛」の生産・販売を通して、地元雇用促進や地産地消の取り組み、牛肉輸出への協力など地域振興のリーダー的な存在として、本県畜産の振興・発展に貢献してきた。

経営管理・生産技術の特色

【優れた肥育技術】

肥育技術については、県内最高水準の技術を持ち、平成26年2月の佐賀県畜産共進会（肉牛枝肉の部）で最優秀賞・農林水産大臣賞を受賞したのをはじめ、東京・大阪で開催される全農枝肉共励会（和牛の部）においても最優秀賞・農林大臣賞を2回受賞されるなど、各種枝肉共励会では上位入賞の常連として名前が知られている。

平成27年の肥育成績は、主体の黒毛和種去勢で枝肉重量520kg、1日増体量0.86kgで増体を最も重視しているが、枝肉格付等級4・5率89.9%、佐賀牛率（BMSナンバー7以上）65.3%と肉質も非常に優れている。



寒冷紗設置の牛舎

桑原畜産では、発育の良い肥育素牛を導入し、日常の飼養管理や牛の導入時の輸送および牛舎環境等からのストレスをなくし、素牛の持つ能力を十分に発揮させることに心掛けている。このため、素牛導入時の衛生対策として、全頭に抗生物質を投与して疾病予防に努めており、事故率は0.3%（4頭）と非常に低い。

あわせて、牛肉の加工販売で牛肉を取り扱っていることから、購買者が好む肉牛づくりを心掛けている。

【徹底した肥育牛の飼養管理】

基本的な考え方として、規模拡大に伴う資金繰りを円滑に行うために、まずは生産技術を向上させることで収益性を確保することに努めている。肥育部門の従業員については、牛舎ごとに担当者を決めており1人で150頭～200程度の肥育牛の導入から出荷まで飼養管理を行うが、従業員同士がお互いの肥育成績を検討するなど、飼養管理への従業員の意識が非常に高い。

牛への環境ストレスを軽減するために、換気には十分気を配っており、牛舎屋根への換気と2牛房に1機取り付け付けた換気扇による横への強制換気により通気性を確保している。また、西日に対しては寒冷紗を設置して暑熱対策を徹底している。

牛房の構造では、牛の飼料給与量に差が出



配合飼料の独自調製

ないように飼槽の間口中央には仕切り棒を設置するとともに、柵にはまったりする物理的な事故が発生しないように、柵の間隔が狭くなるように加工している。

肥育素牛は発育の良い牛を選定し、移動によるストレスの軽減のため、自家産を含め極力県内および隣県から導入している。導入後の子牛は2頭の群飼を行うが、しばらくは2頭の相性を観察し、相性が良くない場合には同じ導入群で牛の入替を行い、再度、相性を観察するという対応を行うが、どうしても相性を調整できない場合には除角して群飼のストレスを軽減している。

すべての導入牛は、導入時の移動ストレス軽減、疾病防止、さらには牛のビタミン水準を整えるために、抗生物質とビタミン剤を投与している。様子がおかしい牛は必ず体温を測り、疾病への早期対応を行っている。

平成16年より、月1回の飼養管理技術コンサルタント（広島県）の受診により、飼養管理方法の指導を受け、肥育成績が向上するきっかけとなった。

飼料給与については、佐賀牛の指定配合飼料をもとに独自に単味飼料を添加し、嗜好性を良くし栄養価を高めている。肥育前期には、栄養価の高いチモシー乾草をカットして食い込ませ、肥育中期以降の濃厚飼料を十分に食い込める腹づくりを行うとともに、導入する

子牛についてもチモシー乾草を給与している繁殖農家の子牛の中から選定するなど、経営者自らが徹底した選畜を行っている。

ビタミン剤（飼料添加及び経口投与）は、肥育ステージや牛の状態により補給量は異なるものの、肥育期間の全期間を通してビタミン剤を積極的に利用し、増体の向上やバラツキ防止を図っている。

これらの取り組みにより、増体と肉質に優れた肥育牛の生産が可能となっている。

また、飼料給与時の牛の観察を徹底し、少しの異常も見逃さないように心掛けるとともに、最低3回実施する飼料の掃き寄せ時にも観察を行い、常に観察を怠らない徹底ぶりであり、結果として死亡牛も年間4頭（0.3%）と少なく、目が見えなくなるようなビタミン欠乏症状を示す牛がないという。このように県内最高水準の肥育成績であるが、更なる飼養管理技術の向上を目指している。

【規模拡大】

食肉販売については、常に大手の食肉会社との競争を強いられているため、系統利用による肉牛販売もできる肥育部門に力を入れるべく、まず肥育牛1000頭を目標に規模拡大を行う構想を立てた。

平成7年にミカン廃園を購入・造成して1棟目の100頭規模の肥育牛舎を建設した。その後、隣接するミカン廃園を数回に分けて購入・造成を繰り返し、さらには農場購入により、約20年で肥育牛飼育頭数1380頭まで積極的に増頭を行ってきた。

平成13年にBSEが発生し全国で牛の流通が停滞した時も、倉庫等の内部を整理し出入り口に柵と飼槽等を設置しただけの簡易牛舎として利用し、一時期に肥育牛を280頭増頭するなど、当初の目標である肥育牛1,000頭を目指して強い意志をもって肥育牛の増頭を



新たに増頭中の肥育牛舎（多岐市）

図ってきた。

平成20年には、九州地域ではまだ普及していなかった動産担保融資に銀行からのアプローチにより試験的に取り組むようになった。販売牛から利益が得られれば資金償還が円滑に運ぶというサイクルを確立でき、規模拡大の後半期については、一般の畜産経営では苦勞する資金繰りではあまり苦勞することがなかった。

規模拡大時に最も苦勞したことは、ミカン廃園を取得する場合に隣接者の同意がなかなか得られなかったため、半月ほど毎晩のように関係者宅を訪問し、説明を行うことであった。現在では、地元からの苦情がないことや収穫祭などの地域のイベントへの牛肉提供などを行い、関係改善に努めていることもあり、隣接者の畜産や桑原畜産への理解も深まり、地元に必要な存在になりつつある。

平成26年には、法人所在地から離れた場所にある多岐市の農場を購入し肥育牛舎の収容頭数も全体で1550頭となり、更なる規模拡大を行っているところである。

積極的な規模拡大を可能したのは、改善意欲・経営意欲が旺盛であったためであるが、後継者の存在や法人化により企業的な経営感覚が養われた結果、技術レベル、経営管理能力が高まり、スピード感のある経営判断がなされてきたことが大きい。肥育牛舎を建設し増頭を開始してか

ら、牛の流通がストップするほどのBSEや口蹄疫の発生や子牛価格・購入飼料価格の高騰、枝肉市況の低迷等多くの困難にあったが、今の状況にまで規模拡大をできたことは経営者のポジティブな考え方で不利を有利に変えていった意欲と日々の努力の賜物と思われる。

地域に対する貢献

【耕畜連携の活動】

牛舎が法人所在地と異なる行政区にあり、また肥育牛の飼養頭数が多く、堆肥の発生量も非常に多いため、堆肥舎等を整備し良質堆肥を生産している。

なお、堆肥は資源循環・耕畜連携を円滑に進めるために、牛舎周辺の耕種農家・果樹農家に無償譲渡することとしている。

また、最近では、バイオ燃料へのオガクズ等の需要が高まり、敷料の安定調達が難しくなりつつある。このため、戻し堆肥でオガクズの代替を行うことを目的に、敷料10tを8時間で乾燥できる強制乾燥施設を導入し試運転を行っているところである。

【環境保全の取り組み】

牛舎周辺に住宅等はないが、法人所在地と牛の飼養地(牛舎)が行政区を跨ぐことから、家畜排せつ物の処理・環境保全には特に注意を払っており、十分なスペースの堆肥舎を確保し良質堆肥を生産するとともに、牛舎周囲の耕種農家・果樹農家との堆肥の流通がスムーズに進むように無償譲渡し、地域の資源循環活動を支援している。牛舎周辺地域への気配りにより、家畜排せつ物に関わる近隣住民からの苦情は一切ない。

【地域ブランドへの取り組み】

佐賀県では、行政、農業団体、肥育農家が一体となってブランド牛「佐賀牛」を立ち上げ、長年にわたり佐賀牛の維持・振興を図ってきた

ところであり、日本を代表するブランド牛となった。桑原畜産も生産者として高品質の牛肉生産と販売頭数の増加により積極的に協力するとともに、他の肥育農家と一体となって宣伝活動等を行ってきた。肥育農家の活動主体である肥育牛部会でも、桑原畜産は支部の役員を歴任し、常に部会活動を支援してきたところである。

また、桑原畜産は牛肉の海外への輸出にも積極的に取り組んでおり、当地域に割り当てのある出荷頭数全頭を引き受けている。具体的には香港・マカオ・北米に輸出する108頭(9頭/月)およびタイに輸出する16頭(4頭/四半期)の延べ124頭の肥育牛を輸出している。佐賀牛率をアップさせるための飼養管理技術の向上と出荷牛の選畜には特に気配りを行っている。牛肉の海外輸出は、当初、販売単価が上下し、必要部位のみの輸出であることや歩留まりが悪いなど販売先としての魅力は少なかったが、関係者との話し合いを行い相互理解を深めるとともに、高品質の牛肉生産を高めることで、魅力ある販売先に変えていったところである。

【地域雇用への貢献】

牛舎のある地元地域から従業員を雇用することとし、中山間地域の重要な雇用の場となっている。

生産部門の主体となる鹿島市肥育牛舎には、管理棟を設置していることから、夜間の飼養管理業務への対応が可能であるとともに、農大生や大学生などの研修生や特別支援学校からの障がい者の実習も受け入れており、3日~1か月程度の実習については、これまで15回程度受け入れを行った実績があり、実習生のみならず、学校関係者への畜産業への理解を深めることに努めた。

【地産地消への取り組み】

桑原畜産では口コミによる食肉の販売先の拡大を非常に重視していることから、地産地



子牛の飼養状況

消の推進による学校給食や病院食等への牛肉の卸販売や攻めの農業政策による牛肉の輸出推進の話題、地元の嬉野市ふるさと納税制度により県内外で佐賀牛への理解が深まっていることが追い風になっている。

学校給食への佐賀牛等の牛肉利用については、市内の小中学校に当経営から牛肉を卸し、卒業生に佐賀牛を食べさせようという時期があり、子どもの心をしっかりとつかったことがあった。

また、嬉野市ふるさと納税制度の返礼品に桑原畜産が販売する佐賀牛が指定されているが、一番の人気商品となっており、毎月、市から追加注文を受け付けている状況にあるが、積極的に対応している。

通常の配送日には、1日に200～300件の発送を行うが、多い時には600件にも発送が増加することがあり、運送会社のトラックが3台必要な日も発生している。

ふるさと納税制度の返礼品（桑原畜産が発送する佐賀牛）を受け取った消費者からは、牛肉の解凍時に出るドリップが少なく「牛肉がきれい」、「たいへん美味しかった」というお礼の電話や手紙があり、再度、牛肉を注文する人が多い。

さらに、嬉野市は温泉で有名な観光地であり、温泉旅館等の佐賀牛をメインとした宿泊プランや温泉・食事プランを利用する観光客



肥育牛舎

も多く、食肉の販売活動を通して地域振興を担っている。

牛肉自体は生鮮品でありイベント等では取り扱いが難しいため、平成10年から独自の牛肉商品券（2000円、3000円、5000円）を作製し、地元の産業祭などイベントに協賛し、牛肉商品券を引換券として提供し、地域と一体となった会社運営を行ってきた。

将来の方向

今後も、牛舎建設用地の確保と地元の了解が得られれば、肥育牛、繁殖牛ともに増頭し、生産部門を拡大していく意向がある。現在、数字的には最終目標はないが、当初の肥育牛1000頭規模を達成したことから、第2目標として県内最大規模の肥育牛2500頭を目指し、多久市の農場を購入するなど着実に肥育牛の増頭を進めている。

また、子牛価格が高いため、経営面を考慮し肥育素牛の安定調達を目指すために、繁殖牛も300頭ぐらい増頭する考えもあり、補助事業の活用など情報収集に余念がない。

後継者は他業種への従事を経て就労し、10年が経過した。現在は、専務として肥育・繁殖農場での技術面の指導と、農場長と社長とのパイプ役として当経営の重要な役割を果たしている。